

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

芸術文化学科
杉浦幸子教授

『＜日本美術＞誕生：近代日本の「ことば」と戦略』

（講談社選書メチエ；92）』

佐藤道信 著，講談社，1996



東京藝大で教鞭をとる、日本近現代美術史家の佐藤道信（1956-）が著したこの本を読んだのは、ちょうど私がイギリス大学院留学から戻り、子どもや大人と美術館訪問を行う教室を細々と始めた頃でした。

イギリス留学中、美術館教育の研究を行っていたのですが、世界中から集まる学生やイギリス人たちと日々出会い、話をする中で、初めて「外」の世界と自分自身が対峙し、否応なしに自分の内面に潜らなければならなくなり、「日本人とは」「日本とは」ということを考えるようになりました。

日本に戻ってきたタイミングで、美術用語が作られていく過程を緻密に追うことで「日本美術」の成立に迫るというこの先鋭的な研究に出会い、フリーランスで活動する情熱と不安の中に、自分を支える一筋の光を見出した気持ちになったことを思い出しました。

大学の4年間はじっくり自分自身と向き合う時間を取ることができる貴重な時間です。国籍に関係なく、ぜひこの本を通して、アートとアイデンティティを探索してみてもらえたらと思います。



『風景との対話（新潮選書）』

東山魁夷 著，新潮社，1967



皆さんもさまざまな形で作品に接したことがあるであろう、日本を代表する日本画家、東山魁夷（1908-1999）が59歳の時に出版したエッセイです。彼との最初の出会いは、

中学2年の国語の教科書に掲載されていた京都・円山公園の枝垂れ桜の絵でした。白黒印刷で、縮小されていましたが、その絵に強く惹き込まれ、中学校卒業の春休みに京都に連れて行ってもらいました。モデルとなった枝垂れ桜を実際に見て、「絵画は虚実の境界線上に立つんだ」と呆然と思ったことが懐かしいです。

文字言語ではなく、造形言語で表現し、伝えるのが美術家である、という考えもあると思います。が、私はこれまでの経験の中で、美術家の中には、観察し、体内にインプットした「もの・こと」を造形言語だけでなく、文字言語で伝えることができる、それも造形言語を扱う人だからこそ独自の言語表現の魅力を提示できる人が確かに存在すると実感してきました。私にとって、その代表が東山魁夷です。彼の作品を見るだけでも私は確かに幸せを感じますが、こと魁夷に関しては、自分の人生の行き越しと照らし合わせながら、彼の作品と文章を往還し続けたいと思うのです。



『とこちゃんはどこ（こどものとも）』

松岡享子 さく，加古里子 え，
福音館，1970



日本を代表する絵本作家、かこさとし（加古里子 1926-2018）。私も「だるまちゃんがころんだ」シリーズなど、小さい頃から彼の絵本に数多く接してきましたが、50年以上前、自分の一番初めの記憶を形作っているのが、この本です。

デパートや動物園といった、子どもたちが大好きな場所のどこかに紛れ込む、赤い帽子と青いズボンの男の子「とこちゃん」。わくわくしながら、目を皿にして彼を探す中で、知らず知らずのうちにかこさとし表現を鑑賞していたんだなあ、と、今更ながらに思います。

東京大学で工学を学び、在学中に敗戦を迎え、その後、セツルメントに身を投じ、紙芝居から絵本の世界に入ってきたかこさとしの表現には、戦後の激動の社会とそこで生きる人々を見つめ続け、描き続け、伝え続けた強さと温かさを感じます。

絵本は、人生最初のアート体験をプロデュースしてくれるメディア。メディアとしての絵本、社会とアートの関係、子どもとアートの関係、イラストレーションと言葉の関係、など、多様な興味・関心に学びの刺激を与えてくれると思います。